

言葉で世界を新たに認識する（教室があるからできる学力づくり）

島本 政志

1. 問題の所在

友だちのやさしい行為に対してある子は「ありがとう」と言い、別の子はそれに気づかない。あるいは当たり前のような態度でその場を過ごす。教室や学校ではありふれた光景である。この両者の違いは何か。

一つ目は、目の前の他者の行為や目の前に広がる世界から意味をくみとる、自分なりに意味づける（意味生成）ことができるかということである。二つ目に、仮に意味をくみとったとして、その後適切に言語表現することができるか、ということである。先ほどの例であれば生活指導を行う場合もあるだろうが、一人ずつへの対応に終わり、子どもたちの資質を伸ばすことにはつながらないという課題がある。

2. 目的と方法

学習指導として学級の全員に、自分の生

きる世界から、主体的によさや美しさを感じ取ったり、自分なりに意味づけたりする資質を伸ばす実践を行いたい。6年国語科「鳥獣戯画を読む」「この絵、私はこう見る」がある。これらの教材は絵画作品、作品に関する説明文から成り立っている。

実践としては①対象物をしっかりと見る
②対象物から自分なりの意味をくみとる、意味をつくりだす
③適切に言語化し他者に交流する
④再度、交流を含めてノートに文章化する。という流れになる。

3. 最初に何を子どもは見るとのか

本文を読む前にまずこの絵を見せたところ Sくんは①黒い色なのに飛び出しそう（感想）
②絵が精密（感想）
③耳をかじっている（分かったこと）
④背景もきれいな（感想）
⑤兔たちが笑っているように見える
⑥なんでも兔と蛙にしたのか？（疑問）
⑦兔と蛙が

相撲をとっている。（分かったこと）
⑧兔が耳をかじられて痛がつている。（分かったこと）
⑨ちゃんと兔と蛙を観察している。（表現への評価）
⑩兔の足が蛙の足と絡まっている。（分かったこと）

子どもたちがもつ最初の気づきには自分が見つけた絵の特徴をそのまま述べているものがほとんどであるが、自分なりの解釈や疑問が含まれている場合もある。表現への評価や描かれたものへの疑問など、高学年らしい特徴も含まれている。絵画鑑賞と言語発達の関連には次のような特徴がある。

小学1, 2年 低学年は体感的にも形や色などをとらえながら、気に入ったものを見る。見つけたことを独り言のように言葉にすることができ。

小学3, 4年 形や色、組み合わせなど様々な感じをとらえて、「この動きがきれい」「この形が面白い」など印象と対象を分けることができるようになる。

小学5, 6年 形や色などから分析的に見たり、心情や気持ちを読み取ったりすることができるようになる。他者や社会の視点を取り入れて鑑賞することができる。

4. 言葉を学ぶことで世界が変わる

鳥獣戯画の絵からは多くの対象を認識できる子もいるが、「あれども見えず」の状態です。見ることもそのものが苦手な子もいる。話し合い学習をすることで、友だちの発言で気づきだす子もいる。話し合い学習の良さは、しっかりと見ていない子も、少しずつ見ることができるようになる点が挙げられる。

一方で子どもたちは普段、「すごい」「かっこいい」「サイコー!」といった定型化された表現方法を頻繁に使う。子どもたちから表出される言葉は貧弱かもしれないが、内面では多くの情報を感じているのだからそれはそれでいいのではないかと、つまり、情報発信の表現が貧弱で、受信の面では豊かに受け取っているのではないかという指摘があるかもしれない。つまりアウトプットの問題ではないかという指摘である。この点に関しては私の体験から考えを述べる。学生時代、美術コースで油絵の指導を受けていた。その時、指導者は「そのりんごは本当に赤色か?」と私に問うた。

指摘されて改めてみると、赤色でも

あるが、普段よく知っている赤色だけで成り立っているとは言いが切れない。赤色の中にも、私の分類の中での階層があることを確かに認識することができた。つまり教授の「そのりんごは本当に赤色か?」という言葉で私の色の認識はざっくりとした赤色に関する色彩の認識能力から、赤にも様々な階層、バリエーションがあることを認識する能力が開発されたのである。

つまり、言語は単なる情報伝達手段ではなく、言語によつて自分を取り巻く世界がより詳しく、彩りを増して認識することができるということが言えるだろう。先ほどの例で言うならば、一般に赤色とひとくくりにされる色の中にはレッドとバーミオンと呼ばれる色もある。つまり同系統の色でも質的な違いを認めているのである。

5. 授業実践

授業では、最初の交流で、兎について Yくんは「右の兎は口を開けて笑っていたり、からかっていたりしているようだ。でも真ん中の兎はちょっと心配してそう。左の兎は蛙に耳をかまれて痛くて叫んでいる

そうですが、みなさんどうですか?」

別の子が「真ん中の兎が心配しているというのはどこを見てそう思ったのかな」

「なんか腕が、『それはやりすぎなんじゃない』と言っているような手だからです。」

すると、数名から「あー」「確かに」という声もれた。応援しているようにも見えらるが、腕に注目してみると、応援の可能性は捨てきれないものの、心配しているように見える。子どもたちは自分が思い込んでいる見方とは異なる見方を学ぶ。全く見えていなかったことに気付くこともある。

『鳥獣戯画』を読む「この絵、わたしはこう見る」では、鑑賞方法、意味づけに慣れていくことができ、言語力の育成を期待できる。そして高まった言語力は鑑賞そのものをより豊かにすることができると言える。

人間らしさの一つは、自分を取り巻く世界に意味を見いだすことに他ならない。子どもたちが自分の生命のかけがえのなき、人生のかけがえのなき、生きる喜びといったものを理解する一つの手立てになればと願っている。